

我が子羽ぐくめ

天の鶴群

金子秀俊

天平十一年八月二十五日 出羽の国に見慣れぬ船が漂着した

渤海国副使己珍蒙の船である

この渤海からの使節 大使の船は遭難した

己珍蒙の船で平群朝臣広成ら四人が帰国した

天平五年発遣の使節は四艘の船からなる

第一船 大使 丹比真人広成

第二船 副使 中臣朝臣名代

第三船 判官 平群朝臣広成

第四船 判官 田口朝臣養年富たくちのあそみやねふ

総勢五百九十四人

第一船 種子島に漂着の後 帰還

第二船 流されて越州に戻り 二年後に帰還

第四船 杳として行方はわからない

乗員百十五人の第三船は崑崙国こんろんこくに漂着した

現地人に包囲され 殺される者 逃亡する者もあつた

また九十人あまりは病にかかり死亡した

生存の広成ら四人は

東シナ海 黄海 日本海と渉り帰国した

東アジアを一周する旅である

萬葉集に　この時の遣唐使の一員として派遣される子に贈る　母の歌がある

天平五年 癸酉に遣唐使の船難波を発ちて海に入る時に親母の子に贈る歌

秋萩を　妻どふ鹿こそ　独り子に　子持てりといへ

鹿子じもの　我が独り子の　草枕　旅にし行けば

竹玉を　繁に貫き垂れ　齋瓮に　木綿取り垂でて

齋ひつつ　我が思ふ我が子　ま幸くありこそ

〔口語訳〕

秋萩を妻どう鹿は独り子しか子を持たないというが、その鹿のよ

うにたつた一人しかいない我が子が遠い旅に出て行くので、竹玉

を緒いっばいに貫き垂らし、齋瓮には木綿を垂らし、身慎み神様

にお祈りをしながら私が案じている我が子よ、どうか無事であつ

ておくれ。

反歌

旅人の 宿りせむ野に 霜降らば 我が子羽ぐくめ 天の鶴群

〔口語訳〕旅人が仮寝をする野に霜の降る夜には、どうか我が子を羽で包んでやっておくれ。天翔り行く鶴の群れよ。

この一人子が 無事に帰国したかどうかは知る由もない

〔メモ〕

引用した歌は『万葉集 巻九』一七九〇〜九一 一番歌。

口語訳は伊藤博『萬葉集釋注』による。

崑崙国は、現在のマレー半島・インドシナ半島方面の総称。

平群広成の帰国時の年齢は五十五歳である。

〔参考文献〕

宇治谷孟『続日本紀 全現代語訳 上』講談社学術文庫

上田雄『遣唐使全航海』草思社

上田雄『渤海国』講談社学術文庫